

■随想

古美術の世界へ

上野千冬 (高38回)

2年前の在京同窓会に参加させていただき、家業が古美術商であるお話を致しましたところ、変わった職業であると関心をお持ちいただいたことがきっかけで、今回こちらに文章を書かせていただくことになりました。一主婦のとりとめのないお話におつきあいください。

私が生まれたのは阿南町新野です。新野は、雪祭りで有名な地域です。生後、1年で祖母と両親に連れられ、私は現在の飯田市上郷に越してまいりましたが、新野は父親の大切な故郷で、子供のころは夏になると盆踊りに連れて行ってくれたり、その後も何度も訪れた大切な場所です。父は中学卒業後一人で下宿をして、飯田高校に通いました。父は当時を思い起こすと、自分の子供たちには不便な思いをさせずに教育を受けさせたいと、私が生まれてほどなく、飯田高校から程近い上郷に越してきました。当時は家の前に田んぼがあり、アメンボを



●うえの・ちゆゆ

1968年1月、阿南町生まれ。上郷小学校、高陵中学校、飯田高校、聖心女子大学英語英文学専攻卒業。東京・日本橋の古美術商、(株)瀬津雅陶堂入社。6年勤務の後、97年3月結婚。現在、東京世田谷で2児の子育て奮闘中。

見つけたりオタマジャクシを捕まえたり、秋にはトンボを捕まえたりして自然の中で伸び伸び元気で活発な子供時代を過ごしました。私の下に弟と妹が3人おりますが、皆、同じ小学校、中学校、そして飯田高校へと進みました。飯田高校では陸上班のマネージャーとして、3年間班員の皆と楽しく過ごしました。陸上競技はご存知の通り個人競技です。選手一人ひとりが自分の目標をもち、ひたすら目標に向かっていく姿をみて、彼らに対して憧れと尊敬の念でいっぱいでした。今でもその頃の気持ちを思い出すことがあります。当時の私は打ち込める目標が見つけられないまま、ただ日々をやり過ごす感じではありましたが、クラスの仲間が楽しく、そんな陸上班のきらきら輝く仲間や先輩に活力をいただきながら、あつという間に過ぎた高校生活でした。そして卒業、東京での生活。いよいよ親元を離れることとなりました。

上京して進学したのは聖心女子大学というカトリックの女子大でした。私にとつてはバンカラなイメージの飯田高校とは正反対のカトリックの教えに基づく聖心女子大学。高校で見つけられなかった目標を求めて全く知らない世界に飛び込んでみたくなりました。中学から高校になり急についていけなくなった勉強で唯一興味があつたのが、英語でした。英語を身に着けられれば海外の人たちとも交流ができるし、大好きな洋楽の歌詞も理解できるし、と大学には楽しく通いました。

未知の世界への憧れ

場所も渋谷区広尾で、外国人もたくさん住み、彼ら向けのスーパ―もあつてよく通つたものです。校内には日本人やアメリカ人のシスターがいらして、女子学生たちがシスターを取り囲んで談笑する姿があちこちで見られて、まるで映画の中みたいでした。大学では1年間の教養課程の後、アメリカ人のS. B. B. のゼミにて南部アメリカ文学を専攻しました。著名なアメリカ文学作家であるウィリアムフォークナー、白人でありながらミシシッピ州に生まれた作家を感じた南部アメリカの矛盾を描いた作品を通して、私も南北戦争の歴史を認識し、人種差別、奴隷制度について興味を持ちました。戦争は二度

と繰り返しはならないと人間は学びながらも、しかしまた繰り返ししてしまう。それは国が変わっても時代が変わつても同じです。今の日本、世界の状況はどうでしょうか。人間の素晴らしさも、愚かさも文学作品から沢山学べます。学生時代の若さゆえの正義感ではありましたが、当時感じたことを今ふと思い出すことがあります。

子育て中の今、毎日のテレビから流れる悲しいニュースを見れば、次世代に向けて家庭から伝えていくこともあると思う毎日です。さて、大学生活は学業以外に華道同好会（広山流）にて生け花の基礎を学び、それと並行して、フランス語サークルでの活動もいたしました。ここでは仲間たちと好みのシャンソンを歌い、フランス語会話の楽しさを味わいました。これらの活動がどれくらい私の女子力を高めてくれたのかは疑問が残りますが、高校時代とは違った女性だけの世界ならではの貴重な経験をいたしました。入学当初の不安な気持ちも、月日が過ぎると共に、自由な楽しい時間を満喫するといった、若者の専売特許のような生活に変わっていききました。高校時代と同様、あつという間に大学生活も終わりを告げることにあります。

1991年4月、聖心女子大学就職部からの紹介で、東京・日本橋にある古美術商（株）「瀬津雅陶堂」に入



MOA 美術館（静岡県熱海市）茶会手伝い。1995年頃

社することとなりました。西洋絵画には興味がありましたが、「古美術商ってどんな仕事をするのかな？」とわくわくしていたのが、昨日のように感じられます。その古美術店は日本橋に今もありません。初めて「瀬津雅陶堂」を訪れた印象は今でも忘れません。自動ドアが開き、照度を落とした店内に入ると、平安時代初期の重要文化財・地藏菩薩立像が、訪れた人を出迎えます。外壁は大谷石張りの地上4階のビル!! 素敵だなあ! これが率直な感想でした。時はバブルも終わりを迎えるころでしたが、こうして私は美術の世界へと入っていったのです。

入社後、私を待っていたのは受付業務や社長秘書、社長のスケジュールや郵便物の管理等々でした。会社とはいつでも個人の会社です。社員数は十数名と小規模な会社ですが、美術商としては日本でも有数の規模を誇る有名なお店でした。日本の古美術が専門ではありませんが、

社長は世界中の美術に興味をお持ちで、様々な作品を目の前にそれらについてお話をしてくださいました。日本の仏教美術、桃山時代の陶器、江戸時代の光悦・宗達・光琳をはじめとする琳派、日本の近代洋画から、中国宋代の絵画、韓国李朝の陶器、エジプトの古代美術やウィーン19世紀末の絵画、印象派、そして、20世紀の現代美術までありとあらゆる美術品を見せていただき、説明もしてくださいました。それは私にとって大変新鮮な世界であり、興味を持って受け入れることができました。

東洋西洋の美に出会う感動

95年の夏に2週間ヨーロッパに研修旅行に行くことになりました。滞在先はドイツ・ベルギー・オーストリア・オランダの4か国でした。特に思い出深いのはこの旅行中にフェルメールを13点も見ることができたことです。フェルメールの絵は現在でも世界で30点ほどしか確認されていないようですが、半分近くをこの旅行中に見ることができたのです。また、ウィーンではクリムトの油彩からデッサンまで多くの作品を見ることができました。ゴッホ美術館では太陽のような明るいまわりの絵の作品や、ゴッホが収集していた日本の浮世絵の数々、それを模倣したゴッホの作品を目の前にして、当時日本



京橋の五月堂美術店の前で

がブームになっていたことを実際に感じる事ができました。今思うと、現在のアニメ文化が世界に広まるような感じでしょうか。しかし当時はインターネットもない時代。収集も大変だったことでしょう。このヨーロッパ旅行では、その絵の数々、本物はもちろん買えないので、たくさんさんの絵葉書や、フェルメールの図録などスリーブケースに詰め込んで帰って来ました。それから何度か引っ越し、結婚で居を移しましたが、それらは今もリビングの片隅に大事に保管してある宝物です。

私にとってその古美術店に勤められたことは本当に貴重な出会いと経験でした。さらにそのお店にてご縁をいただいて結婚しましたが、義父も瀬津雅陶堂のOBであり、24年の勤務の後、東京・京橋で五月堂美術店を独立、開業しました。ここが主人の仕事場になります。主人の専門は日本美術ですが、その中でも特に平安期の王朝文化である仮名文字、古筆や古写経を中心に、桃山・江戸期の陶器、やまと絵が専門です。その中で私が好きなものは五島美術館蔵の国宝・源氏物語絵巻です。これは大変に有

名な美術品で一度は教科書や資料集でご覧になられた方も多いのではないのでしょうか。この源氏物語絵巻は今から数十年前に瀬津雅陶堂の先々代の手元に置かれた作品でもありました。王朝美術の最高峰と言われる源氏物語絵巻、何度見ても、あの優雅な世界に私を呼び込んでくれる、素晴らしい日本の誇りでもある美術品が、年に一度、美術館に行けば目の前に現れるなんてすばらしいことです。

美術商の妻として、母として

大学卒業後、早いもので24年が過ぎました。この間に世の中の情勢も刻々と変化し、美術品に対する評価や人気なども変わってきたと主人がよく話しております。ただ、私にとって美術品は単に美しいものというだけではなく、日々の生活の癒しとなっています。私には息子と娘がおりますが、家のあちらこちらに子供たちの描いた絵が掛けられています。幼かった頃を懐かしむと同時に、部屋の空気の一部となっています。高価なものだけが美術品ではないと思います。情報がとても速いスピードで渦巻いている現代生活の中にほっとする空間を作り出してくれる、美術品はそんな役目を担ってくれているように思います。